第３章

織田信長・斎藤道三・明智光秀・徳川家康

（崇福寺蔵）

（常在寺蔵）

（本徳寺蔵）

（大阪城天守閣蔵）

1 織田信長と岐阜市との関わり

戦乱の世に生まれ、激動の時代に生きた織田信長の生涯は戦いの連続だった。永禄10（1567）年に斎藤道三の孫・斎藤龍興を追放し、稲葉山城を手に入れた信長は、地名を「井口」から「岐阜」に改め、以後約９年間にわたりこの地を天下統一の拠点とした。この間に信長は、自由な商売を奨励する楽市楽座など、新たな政策を取り入れ、岐阜のまちの発展に尽力した。

織田信長肖像画（崇福寺蔵）

織田信長は、天文３（1534）年に尾張守護代の家老・織田信秀の嫡男として生まれる。

このころの岐阜市は美濃国の一部であり、土岐氏が支配していたが、天文４（1535）年頃には斎藤道三が土岐頼芸に仕え、頭角を現わしはじめた。

美濃国は尾張国と敵対関係にあったが、天文18（1549）年頃に、信長と道三の娘・濃姫（帰蝶）が結婚し、織田氏と斎藤氏の間で表面上の和睦が成立する。

しかし天文21（1552）年に父・信秀が流行病により急死したことにより、家督の相続をめぐり一族間で争いが起きたが、信長が家督を相続した。その後、尾張統一を果たした信長は、翌年の永禄３（1560）年、強敵であった今川義元を「桶狭間の戦い」で破り、天下統一を最大の目標とする。そのため、京都に通じる要地である美濃の攻略が欠かせないものとなってきた。

この間に美濃国では、道三と家督を譲った息子の斎藤義龍が不仲になり、弘治２（1556）年に「長良川の戦い」で、道三が討ち死にする。信長は、義父である道三へ援軍を出したがまにあわなかったと言われている。

永禄４（1561）年、美濃国を支配していた義龍が34歳のときに急死し、子の斎藤龍興が若年で後を継ぐと、これを好機とし、信長は美濃攻略を本格化させた。美濃攻めは、木下藤吉郎（豊臣秀吉）の活躍などにより、永禄10（1567）年、稲葉山城（岐阜城）を攻め落とすことに成功する。そしてこの年、信長はこの地に移り住み、以後９年間、「天下布武」をめざし、周辺諸国と戦い続ける一方で、城下町の整備をし、家臣団や尾張商人などを移住させて、まちの繁栄をはかった。検地、関所廃止、楽市・楽座などの政策や制度により、全国的な城下町の一つとなった。

また、信長は「井口」に代わる地名について、親しかった禅僧沢彦に相談をもちかけた。沢彦は以前からこの地の「雅称」として使われていた「岐山・岐陽・岐阜」という３つの名を挙げたところ、信長は「岐阜」を選んで公称とした（ほかにも、岐阜の「阜」は、中国の学問の祖、孔子の生まれた地「曲阜」にちなんで付けられたという説や、信長が名付ける以前から「岐阜」の名称が使われていたという説など、「岐阜」命名の由来には諸説がある）。

トピックス

信長公居城連携協議会　～信長公の夢街道連合～

平成22（2010）年８月２日に、戦国武将「織田信長公」が城を構えた地である岐阜市、近江八幡市、小牧市、清須市の四市が連携する「信長公居城連携協議会」が設立された。この協議会は、「織田信長公」の歩みを現代において体感できる広域観光の路を確立し、信長公の居城をキーワードとした共同PRなどの実施により観光振興を図ることを目的としている。

織田信長ゆかりの名所・旧跡

崇福寺

臨済宗妙心寺派の寺院で、開山は文明元（1469）年といわれる。寺伝によれば、創建は明徳元（1390）年で当初は一山派だった。信長の祈願所としても知られ、本能寺の変で信長と子の信忠が明智光秀に討たれたとき、信長の妻女・お鍋の方がこの寺にその遺品を送り、寺の背後に埋めて位牌を安置させた。これが現在の信長の父子廟となっている。

また、本堂の「血天井」は関ケ原の戦いの前哨戦で岐阜城が落城した際の床板で、討ち死にした信長の孫・秀信の将兵たちの菩提を弔うために天井に張られたもの。現在も血痕が付着しているのが見られる。

円徳寺

織田家ゆかりの寺で、人や車の往来の激しい岐阜市の繁華街、長良橋通り（神田町通り）に面している。

開基年代は不明だが、永禄７（1564）年に織田信長から寄進されたといわれる鐘や「楽市楽座」の制札など貴重な文化財が寺宝として残されている。織田塚から改葬したと伝わる史跡「伝織田塚改葬地」や関ケ原の戦いの前哨戦で岐阜城が落城し、信長の孫・秀信が近臣14人に守られてこの寺に難を逃れ、剃髪をしたという逸話も残されている。

立政寺

文和２（1353）年に智通上人により創建された浄土宗の寺で、美濃など東海地方の中世浄土宗の一大中心地として栄えた。明智光秀と細川藤孝の仲介により、織田信長が戦国最後の将軍となった足利義昭を迎えたり、徳川家康が関ケ原の戦いの際、この寺に立ち寄ったりと歴史上の重要な舞台でもあった。寺内には、絵に描かれた阿弥陀如来像など古い絵画類も多数所蔵されており、境内には開祖の智通上人と蛙の伝説で有名な「蛙なかずの池」や、山内一豊の名が刻まれた墓碑もある。

橿森神社

上加納山(水道山)の麓にあり、第12代景行天皇の時代に創建されたと伝わる。岐阜市内中心地にあり、境内は粕森公園として親しまれている。また、楽市楽座の市神は榎であり、御薗の榎といわれた。

また、境内には、楽市楽座がひらかれた地として所縁がある織田信長を祀るため、京都の別格官幣社建勲神社から分霊を勧請し建立した、岐阜信長神社がある。

織田塚

霞町にあり、信長の父・信秀が斎藤道三と戦い、織田軍が大敗した時の戦死者を葬ったと伝承される。また、織田塚の南西約200mに位置する円徳寺には「伝織田塚改葬地」が所在する。寺伝によれば、安永５（1776)年に改葬されたと伝わる。

2 斎藤道三と岐阜市との関わり

かつて斎藤道三は、油売りの行商から美濃国へ来て、一代で下剋上を成し遂げ、戦国大名になった代表的な人物とされていた。しかし、実際の美濃の国盗りは、道三一代のものではなく、父である長井新左衛門尉とともに二代で達成したものであることがわかってきた。

斎藤道三肖像画（常在寺蔵）

「国盗り物語」の主人公として知られる斎藤道三は、一代で美濃の国を乗っとり、自分の息子に討たれるという、下剋上の代表的人物とされてきた。しかし、近江の六角承禎が自分の子と斎藤義龍の娘との縁組みを止めさせるように命じた「六角承禎条書」という文書が発見され、国盗りは道三が一代で成しとげたのではなく、父・長井新左衛門尉とともに二代で達成したものであることがわかってきた。道三の父は、京都の妙覚寺の僧侶であったが、還俗し西村勘九郎を名乗り、美濃守護であった土岐氏の家臣・長井家に仕えた。そこで次第に頭角をあらわし、名を長井新左衛門尉と改め、土岐氏の三奉行の一人にまで出世した。

天文２（1533）年に新左衛門尉が死去すると、子の長井新九郎規秀（後の道三）が家督を継ぐ。しかし、天文３（1534）年、仕えていた長井家の惣領を討ち倒すと、天文21（1552）年頃に守護である土岐頼芸を追放し、美濃国の実質的な支配者になった。

その間、道三は弱体化した美濃国に攻め入る一向一揆衆、朝倉氏、織田氏、六角氏などの攻撃にさらされる日々が続くが、知略をもってこれをしのぐ。また、天文18（1549）年頃には、織田信長と娘の濃姫（帰蝶）との婚礼を期に対峙していた織田氏と同盟関係を結び、美濃国を安定させた。

また、濃姫（帰蝶）を信長に嫁がせた後、美濃と尾張の国境にある聖徳寺（現在の愛知県一宮市冨田）で会見した際、「うつけ者」と評されていた信長が、多数の鉄砲を護衛に装備させ正装で訪れたことに大変驚き、道三は信長への評価を一変させ、家臣の猪子兵助に対して「我が子たちはあのうつけ（信長）の門前に馬をつなぐよう（家来）になる」と述べたとも伝えられている。

天文23（1554）年、道三は家督を子の義龍へ譲り、隠居した。しかし道三は義龍よりも、その弟である孫四郎や喜平次らを偏愛した。そして弘治２（1556）年、義龍との不仲が頂点に達し「長良川の戦い」となる。国盗りの経緯から道三に味方しようとする旧土岐家家臣団はほとんどおらず、17,500の兵を率いる義龍に対し、道三は2,500の兵で戦い、娘婿の信長が援軍を出したもののまにあわず討ち死にした。

斎藤道三ゆかりの名所・旧跡

常在寺（じょうざいじ）

日蓮宗で妙覚寺の末寺。土岐家の重臣斎藤妙椿（さいとうみょうちん）が宝徳２(1450)年に建立した。「京都の妙覚寺の宗徒であった斎藤道三が還俗（げんぞく）(僧が一般人になること)し、油売りの松波庄九郎として美濃にきて、常在寺を拠点として国盗りをした」と伝えられている。常在寺は、道三以後、斎藤家三代の菩提寺であり道三、義龍の肖像画を所蔵している。しかし、最近の資料では「国盗り」は、道三とその父(長井新左衛門尉)で成しとげたものであることがわかってきた。

鷺山城跡（さぎやまじょうあと）

金華山の西北の平地にある標高わずか68mの山が鷺山であり、その頂上には鷺山城跡の碑がある。現在の鷺山は、山を大きく削られていて、城が実際どの場所にあったのかははっきりしていない。

文治３（1187)年２月、佐竹秀義が初めて城を築いたとされる。その後、永正16（1519)年５月に土岐頼芸が再び築城し、ここに居を構えたが、天文２（1533）年、長良へ移ったとされる。そして、天文21(1552)年頃、斎藤道三が頼芸を追放した後、岐阜城を長男の義龍にゆずって、鷺山城を自分の隠居所とした。

しかし、道三は長男の義龍と不仲となり、この城を捨てて北野城に移り兵を挙げたが、「長良川の戦い」で討死にした。

道三塚（どうさんづか）

弘治２（1556)年４月、斎藤道三は長男の斎藤義龍との「長良川の戦い」で討死にし、その遺体が道三塚に葬られた。天保年間、この塚が長良川の洪水で流されたため、斎藤家の菩提寺であった常在寺の日椿上人が、現在の地（長良福光）に移し、供養碑を建てたといわれている。終戦直後までは荒廃していたが、現在はきれいに整備されている。

濃姫遺髪塚（のうひめいはつづか）

濃姫は、斎藤道三と可児明智城主(現在の可児市)明智光継の娘で才色兼備といわれた小見の方（おみのかた）(道三の正室)との間に生まれた。美濃国主の娘であったため、美濃姫＝濃姫と呼ばれるが、本名は「帰蝶（きちょう）」という。また、「美濃国諸旧記」によると、濃姫の育ったところが鷺山城であったため、「鷺山殿」ともいわれていた。濃姫が信長と結婚後、どのような生涯を送ったかは、資料が少ないためほとんどわかっていないが、岐阜市不動町に「濃姫遺髪塚（のうひめいはつづか）」といわれるものが残っている。

3 明智光秀と岐阜市との関わり

越前（現在の福井県東部）の朝倉義景に仕えたとされるまでの間、明智光秀は何処で何をしていたのか、その前半生は謎に包まれている。しかし、軍事・政治・外交などすべて万能にこなす逸材であったといわれている。本能寺の変にて主君･織田信長を討ったことで歴史に名を刻むことになった。

明智光秀肖像画（本徳寺蔵）

明智光秀に関して、日露戦争において日本の勝利が確定した時期に出版された『帝国軍人読本巻一』に「明智光秀の如きは、稀世の英雄なりしも、私憤のために、大義を忘れ、叛臣の名を、後世に遺せり。」とある。この意味するところは、武将として主君である織田信長の天下統一に大いに貢献したが、私的な怨みで偉業を断った末代までの不忠者ということであろう。

そして、この評価は今も多くの国民に共有されているのではないだろうか。

一方、最近の光秀に対する岐阜県内の風向き（＝評価）は変りつつある。

■ゆかりの地で愛される光秀

京都府福知山市にある御霊神社には光秀が祀られている。光秀が福知山を治めていたころ、洪水が頻繁に発生した川に堤防を築くなど町づくりに積極的に取り組んでいた。その光秀を住民は良き領主として崇め、語り継いでいる。

また、延暦寺焼き討ちの際に焼失した西教寺（滋賀県大津市）に対し、同地の坂本城主となった光秀は、同寺の復興に力を注いだと言われている。そして同寺では、毎年６月14日（光秀の命日）に「明智光秀公御祥当法要」を行っている。また光秀の妻・熙子の墓もある。

■文化人としての光秀

信長は、家臣を統制する手段として自分が認めた者にのみ茶会の開催を許した。いわゆる「御茶湯御政道」である。天正５（1577）年、信貴山城の戦いで大きな手柄を挙げた光秀は、茶会の開催を許された。その後、光秀は茶の湯に没頭したと伝わる。光秀の茶の湯の指導者は津田宗及である。光秀が天下を取っていたら、現在の茶道の祖師はどうなっていただろう。

比叡山焼き討ちの翌月の元亀２（1571）年10月29日、信長は光秀および細川藤孝を呼んで茶の湯を催している。またこの日、所領に関する問題を解決するため岐阜に来ていた山科言継に対して、光秀は銭200疋（２貫文）を贈っている。京都の公卿との交流もあったのである。

4 徳川家康と岐阜市との関わり

天下分け目の関ケ原の戦いを経て、戦いに明け暮れた戦国時代に終止符を打ち、約260年も続く江戸幕府を開いた徳川家康。

ここでは、その戦いの前哨戦の舞台となった岐阜城と、家康平定後の岐阜およびゆかりの地について紹介する。

徳川家康肖像画（大阪城天守閣蔵）

■関ケ原の戦いと前哨戦

慶長３（1598）年に豊臣秀吉が没すると、豊臣方の石田三成と実力者・徳川家康との対立が激しくなった。

慶長５（1600）年、家康が会津に向けて出陣すると、家康に対抗する三成は毛利輝元を総大将に挙兵（西軍）。

一方、清洲城の福島正則や吉田城の池田輝政といった大名が家康に味方した（東軍）。当時の岐阜城城主であった織田秀信は三成の誘いで、西軍方についたことから、東軍との最前線に位置することとなり、関ケ原の戦いの前哨戦が勃発した。

慶長５（1600）年、家康は東軍部隊を、東海道と中山道に分けて進軍させる。８月23日、東海道を上り、岐阜城攻略をめざす正則、輝政が率いる東軍を相手に、秀信は木曽川中流に布陣し迎え撃つが敗北。優勢であった東軍はさらに進撃を進め、岐阜城に追いつめられた秀信は、激しい攻防（岐阜城の戦い）の末、東軍にとらえられた。

■岐阜城の廃城と加納城の築城

徳川家康は慶長５（1600）年、関ケ原の戦いで勝利を収めると、慶長８（1603）年、征夷大将軍に任じられ江戸幕府を開く。

家康は、全国の大名を親藩（徳川一族）、譜代（昔からの徳川家家臣等）、外様（関ケ原の戦い前後に臣従した家臣等）に分け、大都市や要地には譜代大名を置き、外様大名からの反乱に備えた。

加納城の築城し、加納藩主に、天正３（1575）年の長篠の戦いで功績をあげ、家康の娘・亀姫の婿となった譜代大名の奥平信昌を置いたことも、豊臣方の反乱に備えてのことであると考えられる。また、加納城築城の際、慶長６（1601）年に廃城とした岐阜城より、天守、櫓、石垣等を加納城へ移した。

■徳川家康と岐阜町

徳川家康が岐阜町に着陣したのは、関ケ原の戦いを目前に控えた慶長５（1600）年９月13日。翌朝、赤坂へ向かい、15日に関ケ原にて石田三成と激突。ここに勝敗が決した。

合戦以降、岐阜町は江戸幕府の直轄領となり、美濃国奉行の支配下に置かれる。慶長10（1605）年９月21日、家康は金華山で鹿狩りに興じ、慶長16（1611）年４月21日には鵜飼観覧を満喫している。この時、家康が休泊したと考えられるのが、靱屋町の裏に位置した御殿（陣屋）である。御殿は美濃国奉行であった大久保長安によって置かれたもので、元和５（1619）年に岐阜町が尾張藩領となって以降は、その跡地に尾張藩の役所（岐阜代官所・岐阜奉行所）が設置されることとなった。

なお、尾張藩領への編入以降も、岐阜町の人びとが家康との関わりを重視していたことを示すのが、２通の朱印状である。１通は、慶長６（1601）年８月５日に長安名義で発給された５ヶ条の法度、もう１通は慶長７（1602）年３月７日に出された伝馬朱印状であり、この２通は「権現様御朱印」として大切に守られてきた。当初は岐阜町役人の家にて保管され、地元の人びとから「御朱印預り」と尊ばれていたが、岐阜奉行所の設置以降は、敷地内の御朱印蔵にて保管されることとなる。この御朱印蔵は単なる蔵ではなく、家康の神霊を祀る神殿でもあり、家康の命日の４月17日には毎年祭典を挙行していたという。

明治維新を経て、明治12（1879）年には伊奈波神社の境内に東照宮が設置された。社殿は、岐阜奉行所内にあった御朱印蔵を移築したもので、２通の朱印状もここに納められることとなる。加えて、徳川慶勝（旧尾張藩主）より家康着用の長裃１領が奉納され、この３品が神宝とされた。しかし、明治24（1891）年の濃尾震災によって、社殿および神宝３品が焼失。以降は、和歌三神社・須佐之男神社・天満宮と合わせて合祀されていたが、令和３（2021）年に東照宮の社殿が再建され、遷座の運びとなった。

徳川家康ゆかりの名所・旧跡

光国寺

臨済宗妙心寺派の寺院で、山号は大応山。開山は總見寺（名古屋市）第２世の梁南禅棟。慶長19（1614）年に、家康の娘である亀姫が自身の菩提所として建立するが、竣工前に三男の奥平忠政（２代加納藩主）が没したため、この寺で葬儀を執行。忠政の法号に因み「光国院」と号した（後に「光国寺」に改称）。

元和２（1616）年、亀姫は徳川義直（尾張初代藩主）と相談の上で、家康の木像および肖像画を加納城より当寺へ移し、毎月17日に参詣したという。また、家康の命日である４月17日には、江戸時代を通して歴代の加納藩主の代参があったとされる。寛永２（1625）年に亀姫が没した際には、遺命により荼毘に付して寺の隅に葬られた。

盛徳寺

臨済宗妙心寺派の寺院で、山号は香林山。開山は月船禅師。奥平信昌は、かつての封地であった新城に、菩提寺として増瑞寺を建立し、加納でも同じ名の寺院を建立した。その後、元和元（1615）年に信昌が亡くなると、荼毘に付され当寺に墳墓が築かれた。寛永2（1625）年に亀姫が没した際には、その墓所を信昌の墓の隣に設置。寛文６（1666）年には、寺号を亀姫の戒名「盛徳院殿香林慈雲大姉」に因み盛徳寺に改められる。

加納奥平家が途絶えたことで一時荒廃するも、延宝６（1678）年に住持となった卍元師蛮（『延宝伝灯録』や『本朝高僧伝』などの僧侶の伝記を編纂した学僧）によって再興された。